早稲田大学 オープンカレッジ　2024年11月09日

石神井川と王子の街

～東京の小河川を考える２～

【寄藤 昂】

１．石神井川 これまでの歩み

1.1 概要

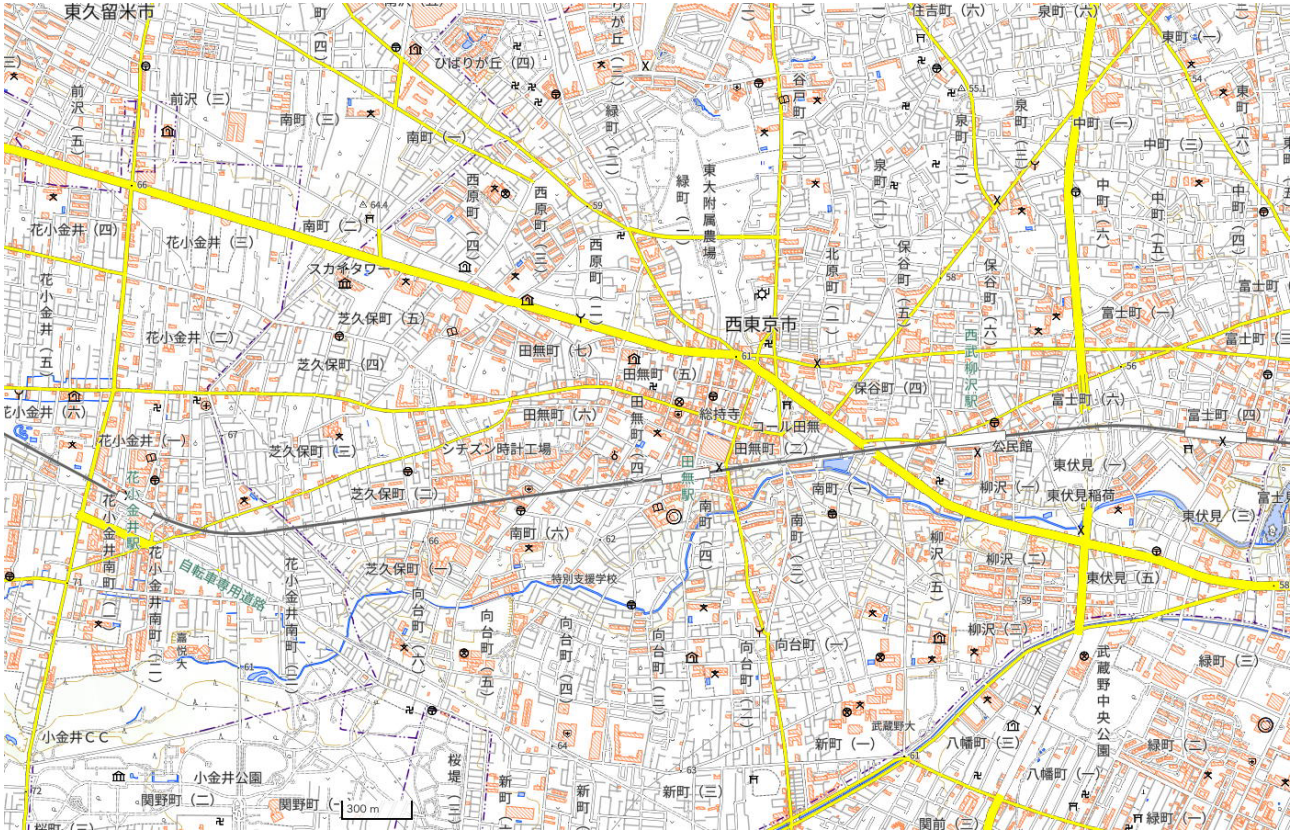
石神井川は幹線流路延長25.2km、荒川水系の一級河川。

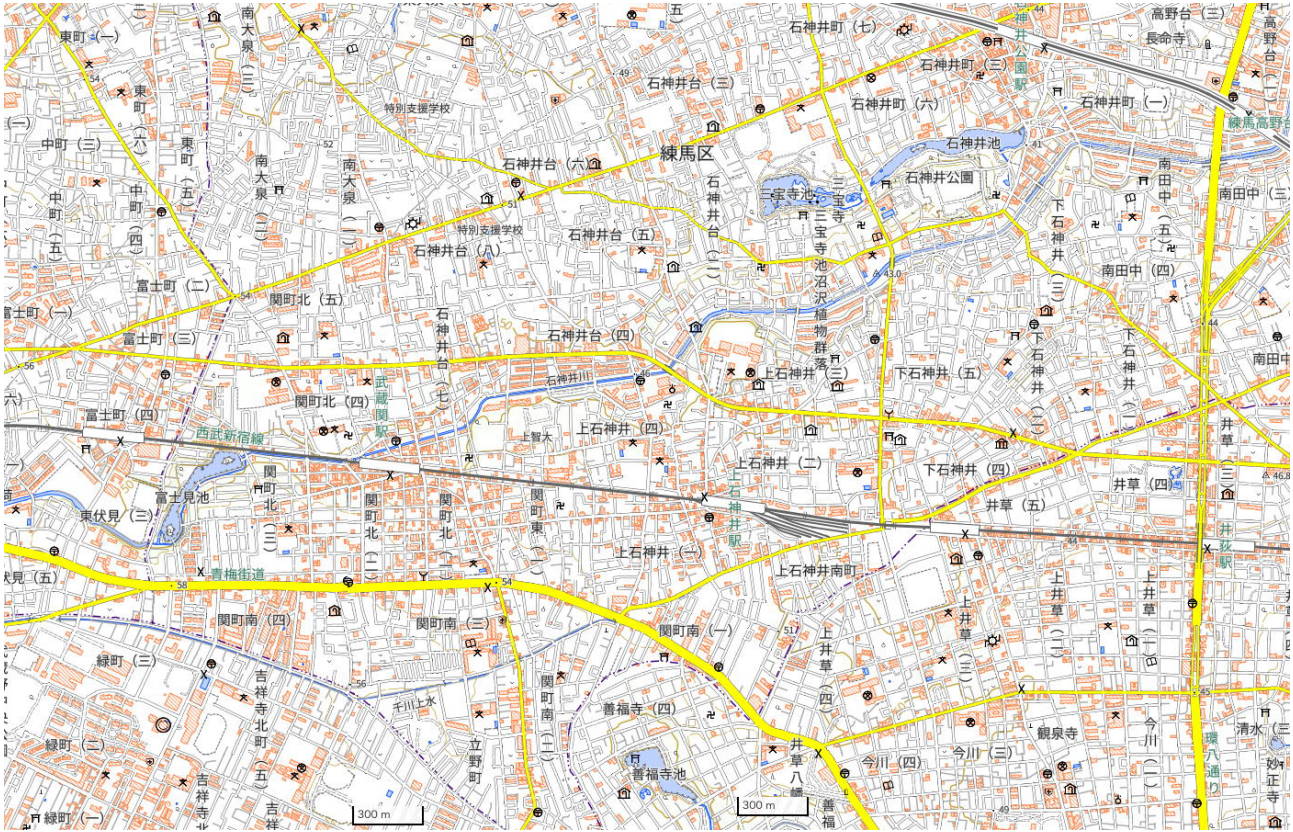
水源は小平市花小金井南町にある小金井カントリー倶楽部敷地内の湧水。中流域で武蔵関公園の富士見池、石神井公園の三宝寺池・石神井池、豊島園池などからの湧水を合わせていたが、現在ではこれらの湧水は減少、地下水汲み上げで補っている。

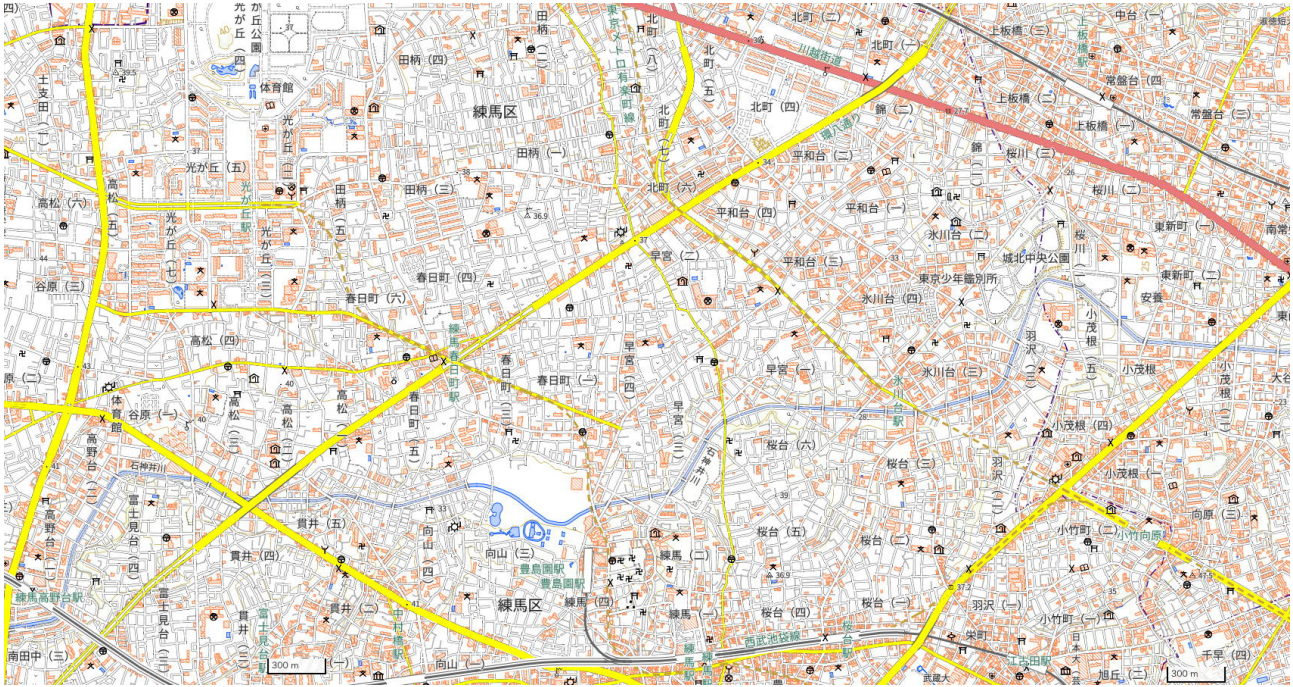
よって平常時には決して水量の多い川ではないが、周辺の都市化によって降雨時には流量が激しく増大することがある。

　下流域、板橋区加賀から王子駅付近の音無橋にかけては音無渓谷と呼ばれる深い谷を形成する。

　現在、渓谷部分はほとんどがコンクリートの垂直護岸となっていて、屈曲部は直線化、洪水対策としてコンクリート壁の高い堤防を設置、飛鳥山隧道（分水路）建設などで景観は大きく変わっている。


東久留米市
西東京市
ひばりが丘（四）
前沢（三）
前沢（五）
南町（三）
南町（一）
南町（二）
南町（六）
南町（四）
南町（五）
南町（三）
西原町（四）
西原町（三）
西原町（二）
緑町（二）
緑町（三）
東大附属農場
谷戸町（二）
住吉町（六）
泉町（六）
東町（一）
東町（六）
泉町（二）
泉町（三）
中町（一）
中町（三）
中町（六）
中町（五）
中町（四）
北原町（二）
保谷町（五）
保谷町（六）
保谷町（四）
富士町（一）
富士町（三）
富士町（六）
富士町（四）
花小金井（四）
花小金井（三）
花小金井（五）
花小金井（二）
花小金井（六）
花小金井（一）
スカ外タワー
芝久保町（五）
芝久保町（四）
芝久保町（三）
芝久保町（二）
芝久保町（一）
田無町（七）
田無町（五）
田無町（六）
田無町（四）
田無町（二）
総持寺
コール田無
シチズン時計工場
西武柳沢駅
公民館
東伏見（一）
東伏見稲荷
東伏見（三）
東伏見（五）
柳沢（一）
柳沢（二）
柳沢（三）
柳沢（五）
田無駅
花小金井駅
花小金井南町（二）
花小金井南町（三）
花小金井南町（六）
自転車専用道路
特別支援学校
向台町（六）
向台町（五）
向台町（四）
向台町（三）
向台町（二）
向台町（一）
富士大
武蔵野大
武蔵野中央公園
八幡町（三）
八幡町（一）
緑町（三）
緑町（二）
緑町（一）
新町（一）
新町（三）
新町
桜堤
関前（三）
小金井CC
小金井公園
関野町（二）
関野町（一）
300 m


練馬区
石神井町（七）
石神井町（三）
石神井町（六）
石神井町（一）
石神井台（三）
石神井台（六）
石神井台（五）
石神井台（八）
石神井台（四）
石神井台（七）
石神井公園
石神井池
三宝寺池
三宝寺池沼沢植物群落
石神井公園駅
長命寺
高野台（三）
練馬高野台
南田中（三）
南田中（四）
南田中（五）
下石神井（三）
下石神井（五）
下石神井（二）
下石神井（四）
上石神井（三）
上石神井（四）
上石神井（二）
上石神井（一）
上石神井駅
上石神井南町
石神井川
特別支援学校
東町（一）
東町（五）
東町（六）
中町（三）
中町（四）
中町（五）
南大泉（一）
南大泉（二）
南大泉（三）
富士町（一）
富士町（二）
富士町（三）
富士町（四）
関町北（五）
関町北（四）
関町北（三）
関町北（二）
関町北（一）
関町東（一）
関町南（一）
関町南（二）
関町南（三）
関町南（四）
武蔵関駅
西武新宿線
上智大
富士見池
東伏見（三）
伏見（五）
青梅街道
緑町（一）
緑町（二）
緑町（三）
吉祥寺北町（五）
千川上水
立野町
善福寺（四）
善福寺池
井草（四）
井草（五）
上井草（一）
上井草（二）
上井草（三）
上井草（四）
井草八幡
今川（三）
今川（四）
観泉寺
清水（三）
妙正寺
環八通り
300 m
300 m

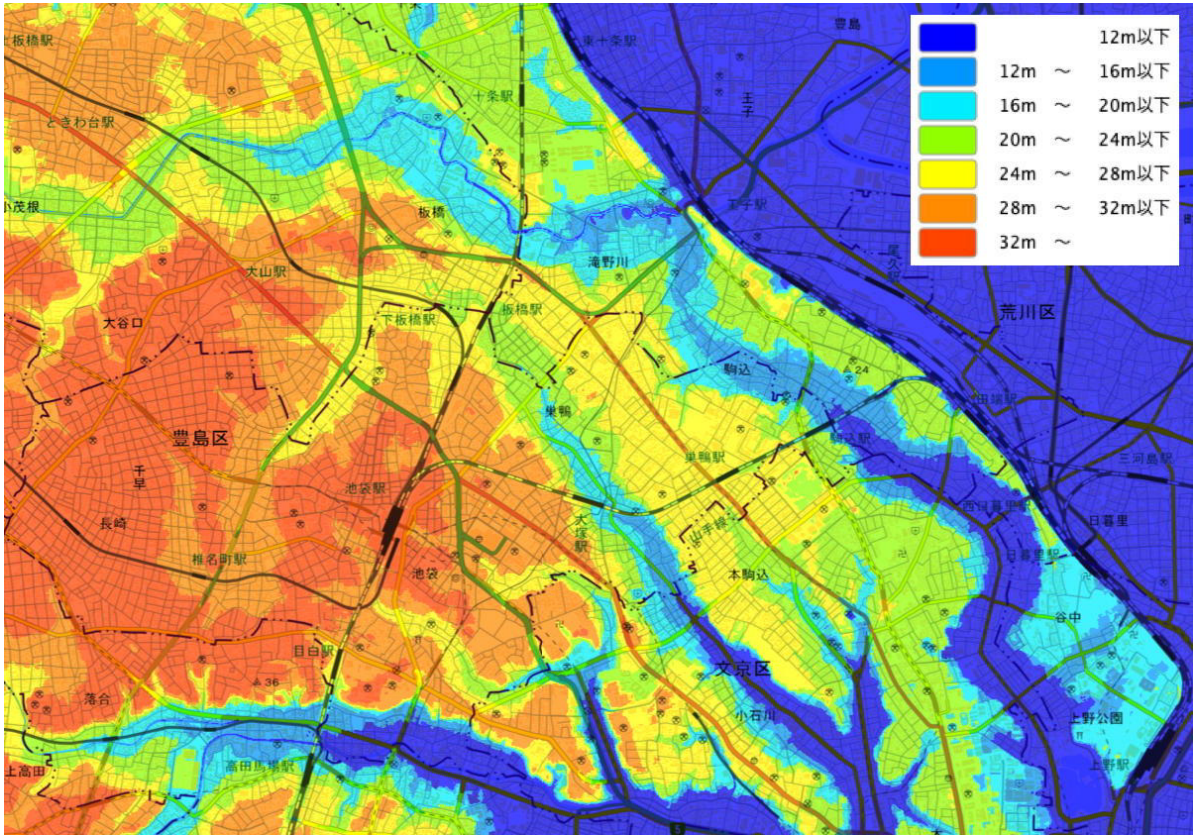

練馬区
練馬区
光が丘公園
光が丘（四）
光が丘（五）
光が丘（七）
光が丘（二）
光が丘駅
体育館
士支田（二）
高松（六）
高松（五）
谷原（三）
谷原（一）
谷原（二）
高松（四）
高松（三）
高松（二）
高松（一）
春日町（六）
春日町（四）
春日町（一）
春日町（三）
春日町（五）
春日町駅
練馬駅
田柄（四）
田柄（一）
田柄（三）
田柄（五）
田柄（二）
北町（八）
北町（七）
北町（六）
北町（五）
北町（四）
北町（二）
北町（一）
東京メトロ有楽町線
早宮（二）
早宮（四）
早宮（一）
早宮（三）
石神井川
貫井（五）
貫井（四）
貫井（二）
貫井（三）
富士見台（四）
富士見台（三）
富士見台（二）
富士見台駅
中村橋駅
向山（三）
向山（二）
豊島園駅
練馬（四）
練馬（一）
練馬（二）
練馬高野台駅
南田中（三）
高野台（二）
高野台（一）
川越街道
東八道路
錦（二）
錦（一）
平和台（二）
平和台（四）
平和台（一）
平和台（三）
氷川台（二）
氷川台（四）
氷川台（三）
氷川台駅
桜川（三）
桜川（二）
桜川
城北中央公園
東京少年鑑別所
東新町（一）
東新町（二）
安養
上板橋（三）
上板橋駅
上板橋（二）
上板橋（一）
常盤台（四）
常盤台（三）
中台（一）
羽沢（三）
羽沢（二）
羽沢（一）
小茂根
小茂根（五）
小茂根（四）
小茂根（一）
小竹町（二）
小竹向原駅
小竹町（一）
向原（三）
桜台（六）
桜台（三）
桜台（五）
桜台（二）
桜台（四）
桜台（一）
西武池袋線
練馬駅
栄町
上石神井駅
日本大学
旭丘（二）
千早（四）
300 m
300 m

常盤台（三）
前野町
泉町
宮本町
富士見町
常盤台
稲荷台
本町
上十条（三）
中十条
東十条
東十条駅
王子（五）
豊島（八）
豊島（七）
豊島（三）
豊島（四）
王子（六）
王子（三）
上十条（一）
東新町（一）
南常盤台（一）
中板橋駅
中板橋
双葉町
大和町
加賀（二）
仲宿
東京成徳短大
王子本町
王子
王子駅
北区
東新町（二）
東山町
弥生町
栄町
水川町
加賀（一）
印刷局工場
堀船
堀船（一）
小茂根
大谷口北町
板橋（三）
板橋（四）
板橋区役所前駅
中山道
滝野川（二）
飛鳥山公園
東北本線
大谷口上町
日本大（医）
大山町
文化会館
大山東町
東武東上線
板橋（二）
板橋（一）
新板橋駅
滝野川
栄町
大谷口
大山金井町
板橋区
西ケ原一里塚
西ケ原駅
北区
尚原（三）
幸町
熊野町
中丸町
川越街道
中板橋駅
板橋駅
滝野川（六）
西ケ原（三）
上中里（一）
高松（三）
南町
熊野町３ＣＴ
滝野川（七）
西巣鴨駅
西ケ原（四）
旧古河氏庭園
千川（二）
北池袋駅
上池袋（四）
西巣鴨（二）
駒込
千早（四）
千川（一）
高松（二）
池袋（四）
池袋本町（一）
西巣鴨（一）
東巣鴨（四）
上池袋（二）
豊島区
300 m
300 m

1.2 流路をめぐる疑問

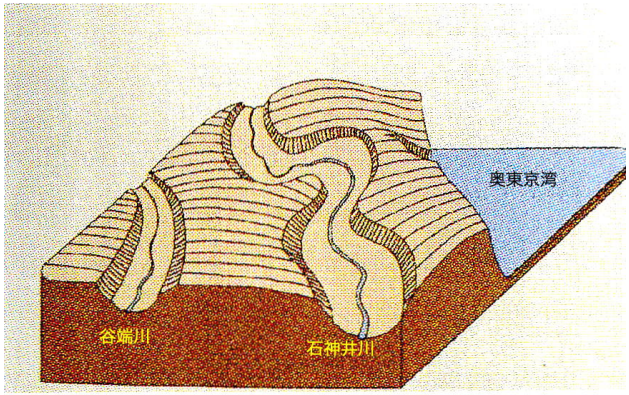
地形起伏の詳細を示す次の図にも明らかなように、飛鳥山の西から本郷台と上野台の間の低地を経て不忍池まで、谷底平野と見られる地形が連続している。

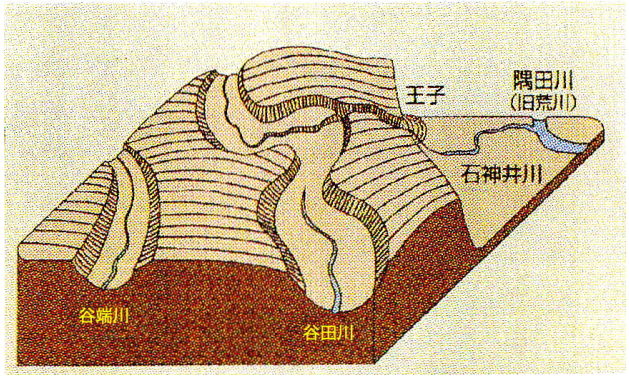
このことから、かつての石神井川は飛鳥山で遮られて南に流れていたと推定されていて、その流路変更の時期・理由については、１.縄文海進期の海岸浸蝕による河川争奪だったとする説、２.戦国時代または江戸初期の人為的開削とする説、などがあって未だ結論は出ていない。


12m以下
12m ～ 16m以下
16m ～ 20m以下
20m ～ 24m以下
24m ～ 28m以下
28m ～ 32m以下
32m ～
板橋駅
ときわ台駅
小茂根
大山駅
大谷口
下板橋駅
板橋
板橋駅
十条駅
東十条駅
滝野川
王子
王子駅
豊島
荒川区
駒込
巣鴨
巣鴨駅
豊島区
千早
長崎
椎名町駅
池袋駅
池袋
目白駅
落合
上高田
高田馬場駅
文京区
小石川
本駅
山手線
本駅
本駅
日暮里
谷中
上野公園
上野駅

河川争奪説は東木龍七、貝塚爽平らによって唱えられ、人為的な工事の結果とする説を都市史研究の鈴木理生が主張していた。

1994年の北区教育委員会の中野守久らによる新たな調査でも河川争奪があったと推定していて、北区立飛鳥山博物館はこの見解に沿った展示を行なっている。





北区立飛鳥山博物館
「常設展示図録」

1.3 分水路の建設と親水公園の整備

1950年代後半から、石神井川においても上流・中流での市街地化が急速に進み、大雨の際には流量が急激に増加して洪水氾濫の危険が増していた。台地上から一気に荒川に流下しているとは言え、飛鳥山の横を抜ける箇所が狭窄部を形成しているため音無橋付近では洪水に見舞われることが重なり、特に1958（昭和33）年の狩野川台風では大きな被害を受けた。

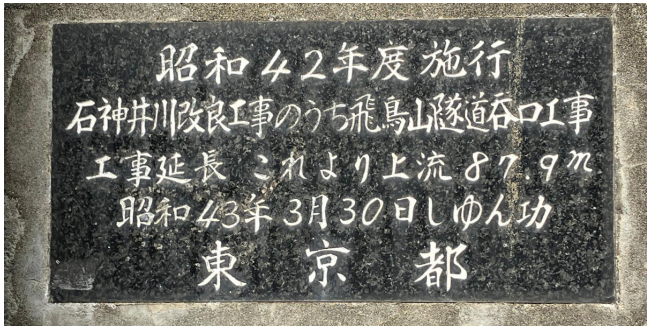
1958年9月27日、狩野川台風の影響で流失寸前の音無川の舟串橋の様子を伝える毎日新聞による写真を次に示す。

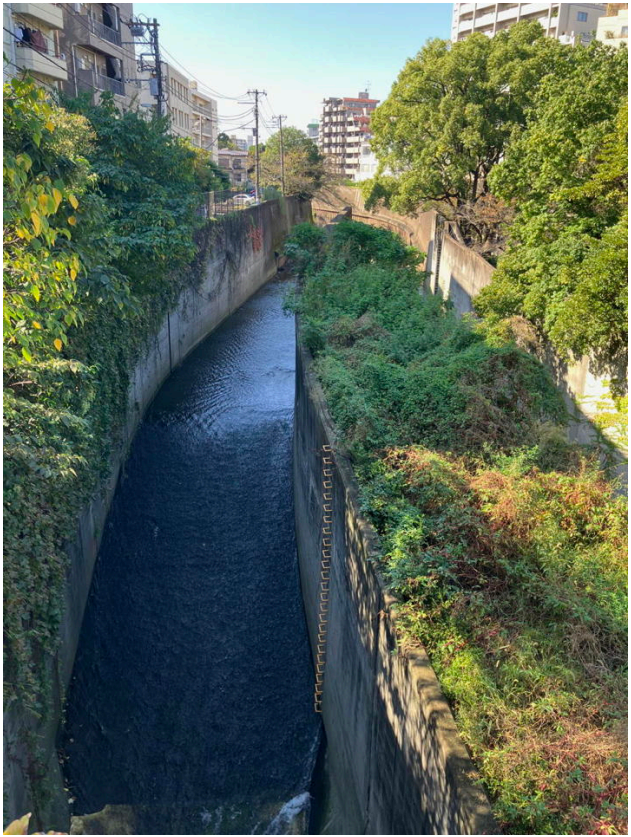
　これを契機に石神井川の改修が進められることとなり、流路の直線化、護岸・堤防の整備に加えて飛鳥山の下を抜ける「飛鳥山分水路」が建設された。水路は、直径6.5mの２本の円形トンネルをシールド工法で二期に分けて整備、第一期工事は1968（昭和43 ）年に、第二期工事は1973（昭和58 ）年に完成した。

　これに伴い、水が行かなくなった音無橋～王子駅の旧流路は人為的に地下水を流す「音無親水公園」として整備された。

飛鳥山分水路の「呑口」

（配布地図の②）





飛鳥山分水路の「吐口」（（配布地図の③））

都電荒川線横の「旧流路」

旧流路は、音無橋手前～王子駅直前までが親水公園として整備され、王子駅南側から暗渠に入り、駅下を通過して正面の出口から手前に向かって流れる。

以下「音無親水公園」の風景（配布地図の①）

2．王子の街　幕末～戦後

2.1 幕末江戸の行楽地

飛鳥山が行楽地として有名になったのは、八代将軍徳川吉宗が江戸の行楽地として桜を植えさせたことに始まる。

歌川孟斎「東京名所の図 あすかやま」
明治13年（1880）
（『浮世絵に見る北区の近代」p.21）

さらに飛鳥山では歌舞音曲が許され、また素焼きの土器を山上から投げる「かわらけなげ」という遊びも流行した。

明治６年（1873）の太政官布達第16号によって、飛鳥山公園は上野恩賜公園、芝公園、浅草公園、深川公園とならぶ日本で最初の「公園」に指定され、一層繁盛することとなった。

三代歌川広重「古今東京名所 飛鳥山かわらけなげ」 明治16年（1883）（前掲書p.33）

2.2 製紙と印刷の街

1873（明治６）年、現在の王子駅前の位置に「抄紙会社」（王子製紙）創設。続く1875（明治８）年には隣接地に「政府印刷局抄紙部」も設置された。王子製紙の工場は1945（昭和20）年の空襲で焼失し再建されなかったが政府印刷局の方は存続、現在国立印刷局王子工場となっている。

これらはいずれも「石神井川の水」を利用すること、荒川という運搬路（舟運）に近いことで立地していた。

この時代には工場の煙は「近代国家の象徴」と受け止められ、屢々浮世絵の題材にもなっていた。

次に示すのはその一例で、

有山定次郎「東京名所 王子飛鳥山ヨリ製紙会社の風景」

明治26年（1893）

（『浮世絵に見る北区の近代」p.73）

王子製紙は第二次大戦後財閥解体の対象となって十条製紙、本州製紙；苫小牧製紙に分割された。

爆撃で焼失した王子工場の他、この地域では現在の東十条駅の東側に十条工場（十条製紙となった）や倉庫があったが、工場は1970年代に撤退、跡地は王子五丁目団地などになっている。

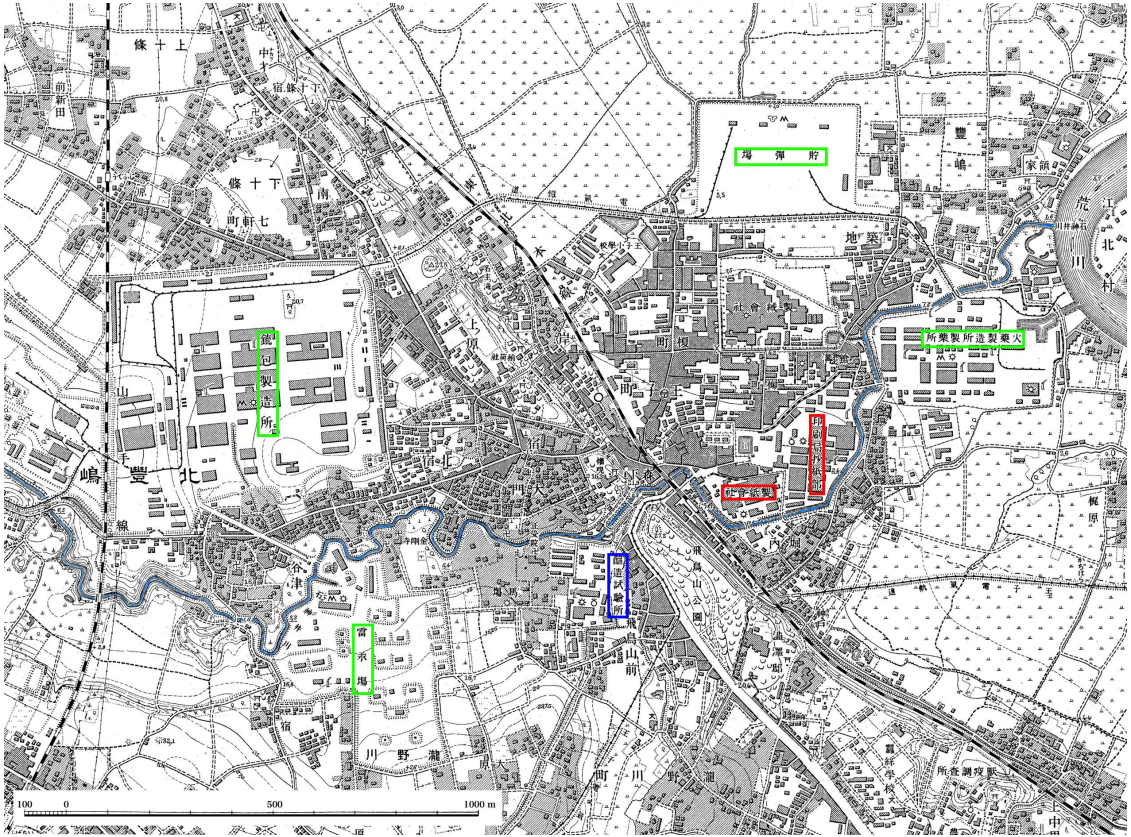
十条製紙はさらに日本製紙と変わり、同地にあった巨大倉庫も2014年に取り壊された。

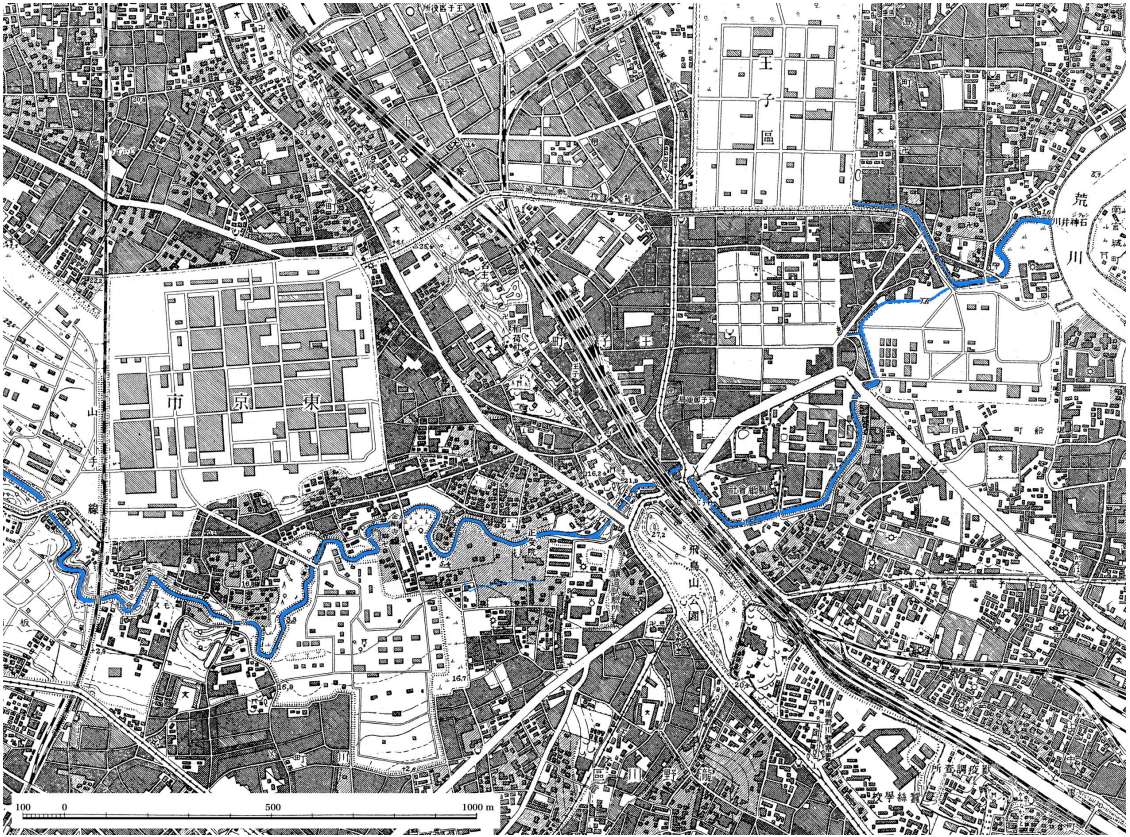
ただ、現在でも読売新聞の印刷工場や多くの印刷会社が立地していることが歴史を感じさせる。

2.3 軍事施設とその後

明治時代、現在の赤羽・十条・王子地域には多くの軍事施設が設置された。

王子周辺には、火薬、雷管、そして銃包（弾丸）の製造所や貯蔵庫が置かれた。中心となったのは1905（明治38）年に設置された「東京砲兵工廠銃包製造所」で、その後も整備が進められて第二次大戦期には「東京第一陸軍造兵廠」となっていた。


鐵包製造所
陽彈貯
所樂製所造製樂火
印刷局抄紙部
吐字鉛製
砲兵試驗所
富永場
100 0 500 1000 m


東京市
王子區
荒川
飛鳥山公園
100 0 500 1000 m

示した地図は、大日本帝国陸地測量部による１万分の１地形図、大正５年発行と昭和14年発行の図の一部である。

（着色・加筆は寄藤）

大正５年版では緑で囲んだ軍関係施設の名称が明示されているのに対して、昭和14年版では全て記されてないことが、30年戦争に踏み出す直前であったことを窺わせて興味深い。

第二次大戦終戦時、北区の総面積の10％を占めていた軍用地の多くは米軍に接収された。返還後は赤羽台・桐ヶ丘などの大規模団地や公園・文化施設用地などになっている。

大正５年版地形図で赤印は製紙・印刷関係、青印が国立の醸造試験所である。

醸造試験所（地図の⑨）は1904（明治37）年に創立された日本で唯一の国立醸造研究機関で、その第一工場は煉瓦造３階建て、明治を代表する建築家の一人で既にビール工場の設計を手掛けていた妻木頼黄（つまきよりなか）が設計に当たった。

国指定重要文化財（建造物）である。

2008年に建設された北区立中央図書館（地図の⑦）は、旧造兵廠の弾丸工場だった赤煉瓦建物の一部を象徴的に保存・活用している。

またベトナム戦争当時「米陸軍王子野戦病院」とされた旧造兵廠火工廠の本部建物は1971年に返還され、1981年から「中央公園文化センター」（地図の⑧）として公開されている。

3．石神井川と王子の街の現在　現地を歩くために

3.1 ２つの緑地

音無親水公園から石神井川に沿って上流（西方）に進むと、異様に高いコンクリート堤防に出会う。

しかし、橋の上から河道を見ると平常時の水位は非常に低いのであり、逆に大雨などの際の増水の凄まじさが窺われる。

非常時の遊水池の役目も負っているのが、曲流跡を利用して整備された「音無さくら緑地」と「音無もみじ緑地」である。

音無さくら緑地（地図の④）

音無もみじ緑地（地図の⑤）

3.2 名主の滝公園（地図の⑥）

王子の周辺は武蔵野台地の突端で崖が多く、「王子七滝」と称するなど多くの滝があったとされる。現在ではそれらは全て消失し、この「名主の滝」が "唯一" となっているが、これは実は安政年間（1854〜1860）に当地の名主だった畑野孫八が自分の屋敷内に水を引いて造った、言わば造園の産物であった。

その後民間施設となったが戦災で焼失、東京都が土地の買収と橋や東屋などの修理を進め、1960年（昭和35年）に都の有料公園として開園、1975年（昭和50年）に北区に移管された。

　公園内は回遊式の庭園となっており、男滝（おだき）、女滝（めだき）、独鈷の滝（どっこのたき）、湧玉の滝（ゆうぎょくのたき）の4つの滝が復元されている。これらの滝は地下水をポンプで汲み上げて水を流しており、滝から流れた水は小川となって園内を巡り大小の池に注いでいる。（現在は男滝のみ稼働）

　名主の滝公園は、これらの滝と池、ケヤキ・エノキ・シイ、そして100本余りのヤマモミジが植えられた斜面を巧みに利用して自然の風景を取り入れた無料の公園となっている。

女　滝
独鈷の滝
男　滝
湧玉の滝
茶　室
管理事務所
入口
現在地
薬医門
入口
滝の流れる時間：午前10時から午後4時までです。
名主の滝公園案内
北　区